

平成 4年 4月 15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室

(青梅市駒木町 1-684 Tel.0428-23-6859)

ツバメとイワツバメ

「生物暦」という言葉があります。生物たちは季節により、姿を現したり、花を咲かせたり、卵を産んだりという変化を見せてくれますが、その移り変わりを季節のカレンダー（暦）代りに使おうというものです。その生物暦に登場する代表選手の一人にツバメがいます。陽気が暖かくなり、ツバメの姿を見ると「ああもう春か」と思い、夏が終り、ツバメの姿が見えなくなると「そろそろ冷え込むな」と感じるわけです。ツバメのような渡り鳥が姿を現した最初の日を「初認日」、姿を消した日を「終認日」と言い生物暦の大切なチェックポイントになります。ツバメの場合はよく春の彼岸（初認）から秋の彼岸（終）までと言われます。このような季節による生物の移り変わりは、昔は農耕や日常作業の目安として注目されたのですが、最近では余り使われなくなりました。

さて、日本にいるツバメの仲間は、ツバメ、コシアカツバメ、リュウキュウツバメ、ショウドウツバメ、イワツバメの5種類です。（因みに世界中では約80種）。このうち青梅でよく見られるのは「ツバメ」と「イワツバメ」の2種類。この両種は一見するとよく似ていますが、よく見ると体の色や体型、巣の形などから簡単に区別できます。例えば、ツバメの巣は上部の開いたお椀型、イワツバメの巣は上部まで塞がった半球型の形をしています。そして、ツバメは民家や建物の軒先へ単独～数個の巣を作るのに対し、イワツバメは大きなビルや橋などに集団で巣を作ります。ですから、農村部や小規模の町にはツバメが多く、大きな建物が立ち並んだり、山間部でも大きなダムや橋などが作られるとイワツバメの数が増えると言われています。

10年程前までは、青梅市役所の建物がイワツバメの有名な集団営巣地でしたが、現在は青梅線の河辺駅が営巣地になっています。（当時、青梅市役所には750個以上のイワツバメの巣がありました—日本野鳥の会奥多摩支部報No.16より）。何故、営巣地が青梅市役所から河辺駅に移動したのか、原因はよく分からないのですが、ダニなどの寄生虫が増えたためであろうとか、建物が巣を作りやすい構造であるからだろうなどと言われています。近年、首都圏ではイワツバメがその営巣地を拡大していることが知られています。今後、青梅市でも都市化が進んでいくことが予想されますが、それに伴い、市内のツバメとイワツバメの分布がどうなるのか注目されます。ツバメとイワツバメは季節の変化を教えてくれるだけでなく、環境の変化も教えてくれることになりそうです。

（文責 櫻岡幸治）